

工学部

I	教育水準		教育 7-2
II	質の向上度		教育 7-5

I 教育水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 教育の実施体制

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「基本的組織の編成」については、9 学科からなり、専任教員一名当たりの学生数は 13.7 名（平成 18 年）、14.1 名（平成 19 年）と全国平均よりおよそ半分と少なく、良い教育環境を維持するなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

「教育内容、教育方法の改善に向けて取り組む体制」については、教務委員会による学期毎の授業評価と卒業時のアンケート、教育企画委員会による卒業生アンケート結果を、各教員へフィードバックするとともに、アンケート結果の解析・議論のためのファカルティ・ディベロップメント（FD）研究会を開催し、結果を報告書として公表している。また、外部評価者、県内企業及び東海地区の高校からも意見聴取を行いカリキュラムの改正により改善するなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、工学部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、教育の実施体制は、工学部が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

2. 教育内容

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「教育課程の編成」については、教養教育と専門教育からなり、教養教育は教養教育推進センターが開設する科目と工学部が開設する科目からなり、工学的見地からの教養教育を取り入れていること、昼間コースでは教養科目 34～38 単位、学部共通科目 15～28 単位、

学科教育 66～83 単位とし、2 年次進級時と 4 年次卒業研究着手時に指定単位取得の関門を設けて指導・教育するなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

「学生や社会からの要請への対応」については、学生や社会の要請により、他学部の授業科目の履修、他大学との単位互換、編入生の既取得単位の認定、有職学生に対する長期教育課程の履修、ハノイ工科大学ツイニングプログラムによる編入生の受入れ、外国の協定大学との単位互換を実施し、インターンシップの実施、大学院博士前期課程の授業内容との連携を図り学生や社会からの要請に対応するなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、工学部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、教育内容は、工学部が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

3. 教育方法

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「授業形態の組合せと学習指導法の工夫」については、講義、演習、実験・実習のバランスを取り、少人数授業、フィールド型授業、情報機器を利用した授業、ティーチング・アシスタント (TA) を活用した授業を取り入れるなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

「主体的な学習を促す取組」については、新入生ガイダンス、学年別・学科別ガイダンスにより、学生が適切に履修選択できるような指導、図書館、情報メディアセンター、コンピュータ室などの学習環境の整備、グレード・ポイント・アベレージ (GPA) 制度や学生表彰制度を導入するなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、工学部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、教育方法は、工学部が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

4. 学業の成果

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「学生が身に付けた学力や資質・能力」については、2 年次への進級率は平成 16 年度から平成 19 年度でほぼ 97%と高く、卒業率は 75.6%でほぼ全国平均となるなどの相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

「学業の成果に関する学生の評価」については、卒業生のアンケート調査によれば、教養教育に対して「十分満足できた」と「まあまあ満足できた」を合わせて 81%、授業評価、卒業時のアンケート調査では工学基礎科目、学部専門科目、卒業論文に対して、「満足」と「やや満足」を合わせて、それぞれ、81%、82%、86%（平成 17 年度の調査）、大学満足度については「満足」と「ほぼ満足」を合わせて 72%（平成 19 年度の調査）となるなどの相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、工学部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、学業の成果は、工学部が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

5. 進路・就職の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「卒業（修了）後の進路の状況」については、卒業率は増加しつつあり、就職者の7割程度が製造業や建設業などの専門的・技術的な職業に従事している。また、卒業生の48%が大学院へ進学し、6年一貫教育を目指して教育環境を整備するなどの相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

「関係者からの評価」については、卒業時のアンケートによれば、就職先の満足度と進学先の満足度に対して「満足」と「ほぼ満足」を合わせてそれぞれ、95%、90%となるなどの優れた成果があることから、期待される水準を上回ると判断される。

以上の点について、工学部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、進路・就職の状況は、工学部が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成20年度及び平成21年度に係る現況を分析した結果、平成16～19年度の評価結果（判定）を変えうような顕著な変化が認められないことから、判定を第1期中期目標期間における判定として確定する。

II 質の向上度

1. 質の向上度

平成16～19年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

相応に改善、向上している

[判断理由]

「大きく改善、向上している」と判断された事例が1件、「相応に改善、向上している」と判断された事例が2件であった。

上記について、平成20年度及び平成21年度に係る現況を分析した結果、平成16～19年度の評価結果（判定）を変えうような顕著な変化が認められないことから、判定を第1期中期目標期間終了時における判定として確定する。